

ことばの意味とところ

諺と解字

たいざん つちくれ ゆず
泰山は土塊を譲らず

秦の始皇帝がまだ西国の一国王でしかなかった頃のこと、秦国譜代の重臣たちが、よそ者の追放を決議し、これを実行しました。その時、よそ者であったために大臣職から追放された李斯という人が秦王に上書した文の中にある言葉として有名です。

泰山は中国第一の名山で、諺などによく出てくる山の名前です。さて、この上書文の原文には、このあと『故に大なり』とあり、続いて『河海は細流を選ばず。故に深し』と対句になっています。

その意味は『高大な泰山は、わずかな土くれでも辞退せずに受け入れたからこそ、あのように高大になったのである。また、黄河や大海は、どんな細かい流れでもえり好みしないで受け入れるからこそ、あのように深くなったのである。よそ者だからと言って、これ

を排斥するような狭量な気持ちでは、とても天下統一の大事業は出来ない。大小、清濁併せ呑むの大度量が必要である』という意味です。

秦王はこれを読み、もっともだと思い、李斯を元通り大臣に登用すると同時に、よそ者の追放令を廃しました。それで秦は、彼の謀を用いて天下を統一することに成功するわけです。



さて、壤と讓という字が用いられています
が、この『讓』についてお話ししたいと思
います。襄は、旧字体は『襄』です。衣と叩と
艹の三つから作られた字です。衣は言うま
でもなく『着物』のことです。叩は、口を二

つ並べたもので、『口論する』『議論する』ことを表わしたもので、『ワイワイ騒ぐ』『ぶつ
ぶつ言う』という意味や『戦う』(戦) という意味に使われます。

艸は、古い形は、土と人と手の組み合ったものです。だから、襄は、着物を脱いで、
ワイワイ言いながら畑仕事をすることを表わしたもので、『仕事の能率を上げ、仕上げる』
という意味の字です。『醸造酒』の醸は『酒を作る』ことです。酒の材料を仕込み、何日
かすると発酵してブツブツ言いだします。それが止んだ時が、酒の出来上がりです。『讓』
も、お互いに言いたいことを十分に言う、自然に相手の立場や気持ちもわかり、『ゆず
る』気持ちになり、対人関係が立派に出来上がるのです。『謙讓』とは、ただ相手の言う
なりになる『従順』とは違うことをよく知ってほしいと思います。

『嬢』は、『出来上がった女』ですから、ほんととは幼い女の子を『お嬢さん』というの
はおかしいわけです。また、壤が『穀物や野菜を立派に作り出せる土』を意味する字であ

るように、嬢は『立派に子供を産む能力を持った婦人』という意味の字である、と考えられます。

『五穀豊穰』の穰は、『立派に実った稲』という意味の字です。人名では『みのる』と読みます。襄の人名が『のぼる』というのは同じ字音の『上』からその意味を借りたものです。

あま いし うが 雨だれ石を穿つ

雨だれの落ちる下の石には、くぼみが出来ています。水滴が石に穴を開けたのです。言うまでもなく石は堅く、水には全く堅さが見られません。その水が、それも一しずくの水が、堅い石に穴を開けたのです。

ほんのわずかなことでも、同じことを長い間継続して反復していると、いつかは必ず大きな仕事を成し遂げるものだ、という意味の教訓です。人間は、能力よりも、才能よりも、根気の方が大切だ、ということをよく表した教訓だと思います。



世の中には、よく次から次へと仕事を変える人がいます。それでうまく成功したとしても、世の人々から感謝され尊敬されることはまず少ないと思います。その道三十年、いや四十年、五十年と同じ仕事をこつこつと続けた人の仕事に比べたら、中身がうすいに決まっています。これがさらに、親から子へ、子から孫へと受け継がれた仕事になりますと、一層光彩を増し

ます。人間国宝と言われる人々の技術は、多くは何代にもわたる努力によって、初めて達成された技術だと思っています。

さて、石という字の「𠩺」は、「雁だれ」と言っても、崖（がけ）の意味をもったものです。石の「口」の部分が形を表していますが、これだけでは「くち」と区別できませんので、崖を加えたものです。

広く平らな所を「原っぱ」とか「野原」と言いますが、中国の古い使い方では、低くて平らな土地を「野（平野）」と言い、高く平らな土地を「原（高原）」と言って区別しています。「𠩺」の「ノ」が崖で、「一」は崖の上の平らな所を表しているからです。

穿という字は、牙（きば）を突き通して穴を空けることを表した字です。「突」「穿」の「𠩺」は「穴かんむり」と言っても、「穴」の意味を表します。突は「不意をつく」意味の字ですが、それは穴の中の犬がいきなりとび出すことでこれを表わしたものです。

空は、「穴をあける」という意味の字です。穴は「がらっぱ」ですから、「がら」という意味に使われるようになり、「何もない」ということで「そら」を表すことにもなりました。

「家・客・室・宮・宿」の「宀」は「宇（ウ）かんむり」と言っても、家の意味を表したものです。「穿・空・突・窓・究」などの穴かんむりを宇かんむりと間違える人がよくあります。意味が穴と家と違うことをよく理解してください。（窓は採光と通風のために壁に空けた穴のことです）。

雁だれによく似たものに「𠩺」（麻（マ）だれ）」があります。「𠩺」のように、片方が開放された家を表わしたものです。店や車庫や庁などがこれです。庫は車庫を表した字ですが、車に限らず、物を入れる建物（倉庫）の意味に使われるようになりました。（金庫は「金ぐら」ということで、初めは建物でした）。

ふかいかわ しず なが
深い川は静かに流れる ぐち わざわい もと
口は禍の本

昔の歌に、『底ひなき 淵やは騒ぐ。山川の 浅き瀬にこそ あだ波は立て』という歌があります。『底の知らないような深い河の淵は、決して波の立ち騒ぐということがない。』

静かにゆったり流れている。山川の浅い瀬の方が、チヨロチヨロと音を立て、波を上げて流れている。人もそれと同じように、学問の深い人ほどそれを口に出さず、言葉を謹んで知ったかぶりの高言など決してしない。学問の浅い人ほど、生かじりの知識を得意になつてしゃべり、知ったかぶりをするものである』という意味の歌です。

水の入った瓶でもそうです。いっぱい入っている時には、いくら振つても音を立てませんが、水が少しの時には、ジャブジャブと音を立てるものです。

だから、こんなことを子どもに実際やらせてみせ、この道理を説明してやりますと、子どもは喜んでこれを聞き、またわかってくれるものです。私は、こういう教育法を皆様に推奨します。

先日、うちの幼稚園でも、この『深い川は静かに流れる』を実際に指導しました。すると、保育時間中おしゃべりの多い子に、その隣の席の子が『深い川は静かに流れる、だよ』と言って注意していた、ということを担当の先生から聞きました。

このように幼児期のうちに人間として大事なことを、耳から聞かせると同時に、これを文字として目にも訴え、その上、実験や体験を通して理解させることに努めるなら、きつと立派な心の人間に育つと思います。

今、自分勝手な子どもが多いと言って嘆きますが、子どもが悪いのは、親たちが教育を怠っているためで、親の責任であって、子どもの責任ではありません。このような指導を大切にして頂きたいと思います。



『口は禍の本』という諺も、言葉を謹しむことを教えたものですが、この『謹』という字について考えてみたいと思います。この字は、言と筆とで作られています。この『筆』という字は、『細かい』『小さい』と言う意味の字で、音はキンです。

僅は、人が少ないという意味で、『わずか』という意味に使われています。

謹は、言葉が少ないという意味で、『言葉をつつしむ』意味に使われています。(ついでに言いますと、慎は心をつつしむことです)。

饑饉は、食べ物が少ないという意味で、『饑饉』というように使われています。

これらの字は皆、音はキンです。それは筆(キン)という字がこの字の発音を表すからです。さて、『すみれ』という『小さい』かわいい花がありますね。『筆』という字ですが、なぜこんな字で書き表わすようになったかおわかりでしょうね。

韋編三たび絶つ

紙がまだ発明されなかった時代の書物は、木の札や竹の札(簡と呼ばれ、これが『書簡』という言葉に残っている)に文字を一行ずつ書き誌し、これを一本一本すだれを編むように革ひもでつなぎ合わせ、これを巻物としました。

これを読む時には広げて読み、読み終わるとくるくると巻いて保存しました。だから、書物を一巻、二巻と数えたのです。それで今でも、書物の数え方として『巻』という呼び

方が残っているのです。

「韋」とは、この札を一本一本つなぎ合わせるための革ひものことです。史記という書物に寄りますと、「孔子は、晩年、易経（易の本で、中国の古典である五経の一つ）を愛

読し、余りに頻繁に読んだため、この革ひもが

三度も切れたほどであった」とあります。

この事があって以来、今でも書物を好んでよく読むことを「韋編三絶」と呼んでいます。

さて、韋という字の「𠂔」は、𠂔であって、

「止」の対照形であり足の裏の形（止）を表わしたものです。ついでに言いますと足の止はこ

れで、上の「𠂔」は膝小僧を表わし、膝から下



の部分「足」と言い、「脚」が「あし」全体を表わすのに対しています。英語のfootに對するfootに似ています。

𠂔を逆にした形が𠂔で、韋は逆に向いた足の形で「ずれ違い」を表わした字です。だから「道」のしるしである「𠂔」をつけた「違」は、『道をすれ違う』というのが本義の字です。今は単に「違う」というように使われています。

「偉」は、普通の人とは「違」う人、という意味の字で、「えらい人」つまり「偉人」を表わした字です。今は「偉い」というように使われています。

「緯」は、『あっちへ行ったり、こっちへ来たりする「糸」』という意味の字で、織機の「横糸」を表わした字です。織機に張られた縦糸を「経」と言い、この経を一本おきに杼（ひ）に入った横糸がくぐって左右運動することにより布が織られていきます。

地球上の位置を示すのに、「経度・緯度」という言葉がありますが、南極と北極を縦に

結ぶ線を『経線』と言い、これと直角に交わる、赤道に並行する横線を『緯線』というのは、織機の糸に基づいて作られた言葉です。

また、織機は縦糸が基になって織られますので、書物でも重要な人間の拠り所となる古典を『経書』、『經典』と呼び、そうでない書物を『緯書』と呼びます。

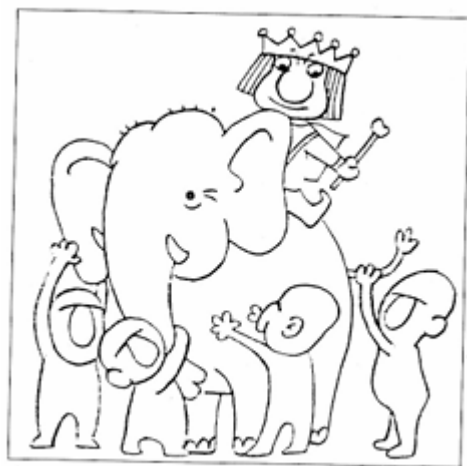
『衛』の行は、『卍』で十字路の形を表わしたものです。だから、『衛』は、道路を अच्छへ行ったり、こっちへ来たりして(パトロール)『まもる』ことを表わした字です。

『警衛』 護衛 というように使われています。

群盲、象を撫でる

昔、ある国の王様が、盲人たちに象を撫でさせてみて、自分が感じ取った象の形状を、

それぞれ発表させました。すると象の足を撫でた盲人は、『象とは柱のような形をしたものだ』と言い、象の耳を撫でた盲人は、『象とは大きな団扇のようなものだ』と言い、象の尾を摸った盲人は『蛇のようなものだ』と言い、わき腹を撫でた盲人は『壁のようなものだ』と言った、ということです。



この話は、仏典にある偶話だそうですが、盲人たちはそれぞれ、自分の体験に基づいて主張しているという自覚が強いだけに、自分の意見だけが正しくて、他の意見は疑問の余地もなく誤っていると確信しており、その故に盲人たちは自己主張のみして決して譲ろうとしなかった、という点に問題があること

を語っています。

勿論、自分の撫でた所は、象のほんの一部分に過ぎない、という自覚があるならば、自分だけが正しい判断をしていて、他は皆間違っている、とは強く主張できるものではありません。他の主張にもきつと耳を傾けるに違いありません。

ところが盲人ですから全体をとらえることが出来ず、自分の撫でた所が全体だと信じ込んでいるのですから、他の主張に耳を傾けるような余裕ある考え方が出来ないわけです。目明きなら決して犯すことのない誤りを、盲人なるが故に陥りやすい、というわけです。象の場合は目明きと盲人でこのような違いがありますが、事件の判断ということになりますと、目明きだからと言って事件の全貌が見えるわけではありません。なまじ見えるだけに部分にとらわれて、判断を誤る恐れが大いにあるます。この諺の真意はそこにあるのだと思います。

さて、群という字は羊と君とで作られています。古い中国語では、“むれ”という意味を表す言葉を“グン(グン)”と発音しました。その発音を表す“君”と、いつも“むれ”をなして生活している“羊”とを組み合わせで作った、このような成り立ちの漢字を“形声字”と言います。

形声字は、意味を表す部分と、発音を表す部分とで成り立っていますから、羊から“むれ”という意味、君から“グン”という発音、というように分解して理解することが出来ます。

盲という字は亡と目とで作られています。亡の上の部分“亠”は昔は人で、亡は人という字でした。人が物かげに隠れて、『人が見えない』『人を見失う』ことを表わした字です。盲は、目と亡とで、『目を失う』という意味を表したものです。このような成り立ちの漢字を“会意字”と言います。意味を会わせるとい言葉です。亡は盲の発音をも表わし

ていますから形声字でもあります。

心ここにならざれば見れども見えず

この言葉は、四書の一つ『大学』に見えるものです。「心を正す」ことの大切なことを説いている文の中に見えます。正しくは『視れども見えず』で、このあと『聴けども聞えず、食らえどもその味を知らず』と続いています。

『見』という字は目と『儿』(古い字は人と全く同じ形で人という字)とで作られ、「人における目の働き」ということで『みる』ことを表した字です。(こういう成り立ちの字を会意字と言います)だから『見よう』という意味がなくても、目を開いていれば目に入ってくる』という見方が、この『見』の『みる』という字です。

『視』は、神の意味の『示』がありますので、祭祀にあたって手落の無いように『注意して見る』ことを表わした字です。従って、この字は『視える』という使い方は出来ません。

『看』という字がありますね。『𦔻』は手という字の変形したもので、目の上に手をかざした形です。だからこの字は『見よう』として見る』という意味の『みる』です。この字も『見える』という使い方は出来ません。

『観』という字は、『心』をこめて見る』という意味の字です。『觀察』『観光』というように使われます。ついでに言いますと、『心』をこめてさそう』のを『勧誘』と言ひ、『心』をこめてもてなす』のを『歓待』と言います。『鑑』が、カンという読み方と『心』をこめる』という意味を持っているのです。

さて、この諺の意味は、『関心のないことには、注意して見たつもりでも実は目にとま

らず、注意して聞いたつもりでも実は耳に残らず、物を食べてもその味がわからない』と
いうことで、五感の働きは、心が正しく働いて初めてその用をなすことを説いたものです。

一般に、目は物を見る道具、耳は音を聞く道具、舌は味をみる道具とされていますが、

実は本当に「見る」ところ、「聞く」ところは

大脳なのです。目も耳も舌も、刺激を受けられ、

これを大脳に送り届けるだけの働きをしてい

るに過ぎません。その刺激を最終的に受けとめ

てこれを判断するところは脳です。つまり心

の働きなのです。だから、心が正しく働かない

ことには、目も耳も舌もその働きを発揮するこ

とは出来ないわけです。



私たちは、子どもの教育にあたって、この諺をよく念頭におく必要があると思います。

子供の関心の全くない時に、また、関心の全く持てそうもないことを、一方的に教えるこ
とに努めても、全く効果は得られない、ということです。

子供の心を無視して、一方的に教え込むとする親の、世に何と多いことでしょう。そ
うすることは効果がないばかりでなく、親子の関係を悪化させます。こころしなければな
らぬことだと思います。

かわいい子には旅をさせろ

「玉も磨かざれば光なし」とか「艱難汝を玉にす」という諺がありますが、これは『人

間は、苦勞を一つ一つ克服することによって能力が養われ、人間としての深みも身に備わ

ってくるものである』ということを表わしたものです。

家では何もせず、何も出来なかった子供でも、旅に出ますと親の助けが得られません。

それで、何事でも独力で、頭も使い体も使って処理する必要があります。その苦労が、人

間としての資質を向上させますので、『子供を

立派な子供にしたかったら、旅に出して苦労さ

せなさい』という訳です。

今の親は暇があまりすぎて、何かと子供の世話をやき過ぎます。だから、子供は頭を使い体を
使う機会が少なく、能力が育ちません。そのため、意思も薄弱で、ちょっとした障害にも簡単に挫折してしまいます。また、耐える力が弱い



ものですから、悪の誘惑にも容易に乗り、非行に走りがちです。

昔の親は、生きること追われて、そのため子供も苦労することが多かったため、それに耐える力も自然に養われ、頭を使い体を使うので頼もしい子供に育ちました。今、そういう子供が少なく、反対に問題のある子供が多いのは、子供が玉を磨く苦労をしなくなつたからです。

今こそ、『かわいい子には旅をさせよ』という諺の意味をよく考え、どうしたらわが子が鍛えられるか、その具体的な方法を真剣に考えるべき時だと思います。

旅 という字は、“𠂔”と“𠂔”の変形である“𠂔”とて作られた字です。

“𠂔”は旗竿に旗がひるがえっている様子を表した字です。

旗 という字は、この“𠂔”に四角形を表す“其”（棋は四角形の板を表わした字で、碁盤や将棋盤を意味したもの）とて、国旗のような長四角の形の“𠂔”を表わし

たものです。

「旒」という「はた」がありますが、これはふちに毛のついたもので、優勝旗はこれにあたります。「旒」という「はた」は、長い布で作られた「吹き流し」のことです。

さて、「旅」は、人々が旗を先頭に立てて行軍することを表わしたもので、「行軍」つまり「たび」の意味を表したものです。また「軍隊」そのものを表わすこともあります。

「軍旅」という言葉がそれです。

戦前の日本の軍隊に「旅団」という名称がありました。大きな軍隊の単位を表わした名称でした。これも「軍隊」の意味を表したものです。

今では、「旅行」というように単なる「たび」の意味に使われますが、それでも集団旅行にはやはり「はた」を立てて歩いているのを見かけます。やっぱり「旅」という字にふさわしい姿ですね。

つ の た う し こ ろ 角を矯めて牛を殺す

『牛の角が曲がっているのを氣にして、これを直そうとしたために牛そのものを殺してしまう』ということで、僅かな欠点を直そうとして、かえってその全体をだめにしてしまうことや、取るに足らないちっぽけな問題にとらわれて、肝腎な問題をなおざりにすることなどを戒めた諺です。

親、とりわけ今の親は、わが子に対して求めることが多いものですから、よくこの諺を座右に置いて、戒めにして頂きたいと思います。

およそ欠点というものは、氣にし出しますとそれが大層大きなものに見え出してきて、たまらなくいやなものに思われるものです。しかし、氣にしなければ、また、氣にならない者にとっては、それこそ取るに足らないものなのです。

それに、欠点は、ある意味ではその人の長所と見えないものでもありません。親に取ってはたまらなくいやな欠点に思われるものでも、よその人にはほほえましく見えて、少なくとも大した欠点ではないことが多いものです。

さらにまた、欠点と長所とは表裏の関係にある場合が少なくありません。例えば、静かな鷹揚な態度の人は鈍感な欠点があるかも知れず、反対に敏感な人は神経質で怒りっぽい欠点を持つ人であるかも知れません。このような場合は、欠点を取り除こうとすれば必然的にその長所を除かれてしまいます。

とは言え、親は子供の欠点を黙って見ては



いられないものです。つい、がみがみと言いがちですが、ではこれが、その欠点を直すのに少しでも役立つかと言いますと、実はその反対なのです。注意すればするほどその欠点が目立つようになることは、気にして触れば触るほどひどくなる「にきび」に似ています。気にせずほっておいた方が、欠点の場合でもにきびの場合でも直りやすいものですが、それがまた難しい点でもよく似ています。

「矯」という字は、矢と喬で作られていますが、喬は夭と高の合字です。音も^{よう}と^{こう}で^{ひょう}です。夭は大の字の頭の部分が横に寝ていますように、「頭の傾いた人」を表わした字です。生まれつき頭の傾いた人は短命なので、夭は「夭折」(若死に)というように使われますが、女の人が故意に首を傾げると、「妖婉」^{ようえん}(なまめかしい)に見えてきます。

さて、「喬」は「高くて曲がっている」のが本義ですが、人名では「たかし」と読むよ

うに、単に『**高**』の意味に使われることが多いようです。『**驕**』は、丈の高い馬のことで、『**勢いがよい**』『**威張る**』意味に使われ、『**嬌**』は、背の高い女のことで、『**魅力的な女**』の意味に使われています。

『**矯**』は反対に、『**曲**』の意味に使われ、『**曲がった矢**』を表わしています。曲がった矢はどうしても直す必要があるので、『**直す**』という意味を表したものです。ほんとに曲がった矢はほっておく訳にはいきませんね。

情けは人の為ならず

この諺は『他人に情けをかけておけば、いつかはそういう人には良い報いがめぐりめぐって返って来るものである。だから、今は他人の為にしているつもりでも、結果的には自

分の為にしているようなものである』という意味で、『人には親切にするものだ』ということをお教えた諺です。

ところが、私の友人が大学でこの諺の意味を書かせたところ、『人に情けをかけることはその人の為にならない』という答や、『人に情けをかけることは自分の為にならない』

つまり損をする』と書いた学生が多かった、という事です。

『人』という言葉は、自分のことを指して言うことでもあります。この『人』は勿論『他人』という意味でなければなりません。また、『**為ならず**』は、『**為ではない**』という意味であって、『**為にならない**』という意味では決し



てありません。

諺というものは、長い時代にわたって、多くの人々の生活の中から生み出された、言わば知恵の結晶ですから、何よりもその正しい意味を汲み取ることが大切です。いい加減な解釈や勝手な判断をしてはなりません。

さて、**情**という字は、**心**の変形である**𠂔**と**青**とで作られた字です。

青という字は、旧字体では**靑**でした。上の**主**は**生**で、これがこの字の音セイ(ゼイ)、シヨウ(ジヨウ)を表わしています。

下の**円**は**丹**で、丹石を表わしています。丹石は赤い色をした石で、赤い絵の具はこの石を細かく砕いてそれから作ります。だから、**丹**は**赤い色**を表わす字として使われるようになりました。**丹心**は**赤心**と同じで**真心**の意味の言葉です。ところが、丹石は青い部分を含んでいて、赤い絵の具を取ると同時に青い絵の具をも取

るのです。つまり、**あお**は丹石より生ずるのです。だから丹と生で**青**とし、これで**あお**を表わしたのです。

晴は、空が青く、日が見えることで、**はれ**を表わした字です。**清**は、水が青く見えることで、水が澄んで**ぎよい**ことを表わした字です。晴も清も、澄んで清らかな状態を表していますので、**青**は**純粹**な意味を持つようになりました。

情は、だから**純粹な心**という意味の字です。**真心****思**いやりの心**なさけ**を表わした字です。

請は、真心をこめて言う**請願**という言葉の字で、**請願**という言葉に使われます。

精は、米をよくついて、表面の薄皮やぬかの部分を除いた白米を表わした字です。純粹な米という意味の字で、薄皮のついた胚芽のある玄米**粗**に対する字です。今は、

粗製・精製**粗末・精巧**というように、米に関係なく使われるようになりました。

うら
むく
とく もつ
怨みに報いるに徳を以てす

第二次大戦が終わった時、中国の蒋介石総統が、『恨みに報いるに徳を以てす』と言って、日本軍将兵を厚く遇してわが国に送り還したことは有名な話ですが、この言葉は古い老子の言葉です。



“うらみ”という言葉を表す漢字には、
怨 恨 憾 などがありますが、
は、いつかは必ず仇を討ってこのうらみを晴ら
してみせる、というように、いわゆる『根にも
つ』といううらみです。

『怨』は、仇を討って直接にうらみを晴らすことは出来ないけれども、せめて皮肉ぐら
いは言って、遠回し（婉曲）にでもうらみを晴らすにはいられないという、うらみを言
います。

『憾』は、怨や恨と違ってその場限りのうらみです。『残念だなあ』と心に感ずるだけ
で、あとにまで残らない、一時的、表面的なうらみです。

『徳』は元『德』で、恵は恵でした。真っ直ぐな心という意味の字で、『真心』を表わ
した字です。他人を思いやる『いつくしみ』の心、つまり仁徳のことです。

『恨みに報いるに徳を以てす』というのは、自分をひどい目にあわせた者に対して、仇
を討たないまでもせめて皮肉ぐらいは言ってやりたいのが当たり前なのに、逆に恩恵を与
えてやることを言います。

す』と言っています。『直』とは、『卒直』『素直』『正直』ということです。

『怨みのある人に対してまで恩恵を与える』ということでは、恩恵を与えてくれた人と同じ扱いになってしまつて、それでは人情に反する。もっと『正直』であれ、というのが孔子の意見です。

この『正直にあれ』が、具体的にどういう行為であるかは、意見の分かれる所があり、私にも自信ある解答は出来ません。ただ、この『直（正直）』ということで、論語に次のような問答があり、これがその『直』を考えるのに役立つと思います。

ある県の長官が、孔子に向い、『私の県には正直者がいます。ある男が羊を盗みましたところ、その男の子供がこれを役所に訴え出ました』と自慢げに話しました。

すると孔子は『私の国の正直はそれと違います。親が盗んだことをその子が知ったとしても、子は親のためにその事を隠します。反対に、子が盗みをし、親がそれを知っても、

親はその事を隠します。その隠す行為こそが人情であつて、その人情に素直に従うのが

『正直』というものです』と答えました。

老子の言葉は、いかにも道教に開祖らしく宗教的であり、孔子の言葉は極めて常識的で、人間味に溢れており、それぞれによくその人柄を表わしていると思います。

水は方円の器に随う

みず ほうえん うつわ したが

人は環境、とりわけ友達によって、善くもなったり、また悪くもなったりするものです。この諺は、その譬えによく使われる言葉で、このあとに『……に随い、人は善悪の友による』と続きます。

出典は、『人君たる者は、なお孟のごときなり。民はなお水のごときなり。孟、方なれ

ば水方に、盂、円なれば水円なり』という孔子の言葉に由来します。従って、『人民の善悪は、為政者の善悪による』というのが本義です。



方は方形のことで、四辺形、四角形のことです。四角形の容器に入った水は四角形になり、円形の容器に入った水は円形になります。四角形の容器に入れた水に向って、『円形になれ』と言っても不可能のように、為政者が悪いことをしていて、国民に『善い事をせよ』と言っても効きめがないことを教えたものです。確かに、為政者が悪いことを平気でするようになりますと、世の中には、悪い事を平気でする人がふえます。勿論、為政者も人間ですから、

過ちを犯すこともあるでしょう。しかし、そういう場合には、それを隠さず、言い逃れをせず、過ちを犯したことを卒直に詫び、改めることです。

論語には、この事を、『君子の過ちや、日月の蝕のごとし。過つや、人皆これを見る。あらたむるや、人皆これを仰ぐ』と言っています。過ちを犯しても、卒直にこれを認め、改めれば、国民もこれを非難せず、かえって尊敬する、ということです。

方という字は、耕作に用いる、^{ズキ}の形を表わした字で、農耕を主とする昔は、生きるために最も必要な道具でした。それで、この字は、『方法』『方途』というように^ズ手だて^テという意味に使われていました。次に、この字は『方位』『方角』という意味に使われ、それが東西南北とあることから『四方』『四角』の意味に使われるようになりました。この諺の『方円』がこれです。

防は、崖を表わす^フ（小里編）と方の合字で、四方が崖になっていることを表わした字

です。また、中国の昔の都市は、四方を城壁で囲いました。これも「防」です。外敵を防ぐためのものだから「防壁」と言い、「防ぐ」という意味になりました。

坊は、家の四方を土堀で囲った建物という意味の字で、寺院、僧の住む所（坊舎）を言います。「坊主」とは、僧坊の主人という意味の字です。僧は頭髪を短く刈るところから、頭髪の短い幼児を「坊や」「坊ちゃん」と呼ぶようになりました。

紡は、四方に糸巻きを置き、それを一本の糸により上げること（つむぐ）を表わした字です。芳は、四方が草花に囲まれていて、香ぐわしいことを表わした字です。では、「彷徨（彷徨）」は何という字か、これは自分で考えてください。また訪は？ 妨は？

あさ かわ ぶか わた
浅い川も深く渡れ

浅い川だからと思って油断をしますと、所によっては深みもあるものですから、ついそういう所にはまって、思いがけない失敗をすることがあるものです。

このように、『物事を見くびって、用心を怠ると、とんでもない失敗をする』ということを警めた諺です。

川は、見た目には実際よりも浅く見えるものです。だから、深くてもせいぜい膝くらいと思っ、それでもズボンを膝よりずっと上までたくし上げて渡ったことが私にもあります。結局



ズボンを濡らしてしまいました。

だから、それからというもの、川を渡る時には、いつもこの諺が強く思い出され、どんなに浅い川でも、深い川を渡る用心をして渡ることになっています。

諺というものは譬喩ですから、単に川を渡る際の教訓であるよりも、広く人生一般の教訓として活用するのが本来でありましょう。『油断大敵』という一般的な注意と受け取ることも、『弱敵といえどもあなどらず』という意味に受け取ることも出来ます。

さて、『浅』という字は、旧字体では『淺』となっています。『戈』は武器の一つである『ほこ』の象形です。だから『伐』という字は、人がほこを取る意味から、『敵をうつ』という意味に使われるわけです。

『淺』は、そのほこを重ねた形で、『ほこを交える』つまり『戦う』ことを表わしています。(戦という字も戈がその意味を表しているのです) 戦えば必ずだれか傷つきそこな

われます。それで、『そこなう↓へる↓わずか』という意味になります。

『浅』は、『水がへる』『水がわずか』という意味で、水の『あさい』ことを表わしたものです。

『錢』は、『わずかなお金』という意味の字で、戦前、円の百分の一というわずかなお金の単位を表わしたものです。『金錢』という時は、単にお金の意味です。

『賤』は、財産を意味する『貝』とで、財産がわずかしかない、『貧しい』、『身分の低い』ことを表わした字です。

『箋』は、『わずかな竹』という意味の字です。紙がまだ発明されなかった時代、木や竹の札に文字を書きました。これを『札(木のふだ)』又は『簡(竹の札)』と言います。

書物は、この札や簡を革ひもでつなぎ、巻物にしました。それで、今でも書物を一巻二巻と呼ぶのです。

『箋』はこの簡の小型なもの、という意味の字で、メモ用に使ったものです。それで、今でも書物より小さな書き物。『便箋』 『通信箋』 『処方箋』などに使われています。

『餞』は、わずかな食事という意味の字で、送別の宴を送る側が謙遜して『餞』と言ったものです。宴の代りに贈るお金を『餞別』と言います。

たいこう さいきん かえり

大行は細謹を顧みず

大事業を成そうとする者は、小さな慎みなど気にしないものだという意味の言葉で、余りちっぽけな事にこだわっていると、大事に失敗することを戒めた諺です。

史記の中でも特に有名な『鴻門の会』で、樊噲が高祖にこの諺を引用して、項羽にあいさつなどせず、失礼して早く逃げることを奨めました。

項羽の謀將 范増は、鴻門の会こそ高祖を殺す絶好の機会であると強く進言していましたが、帰る挨拶をしていたら恐らく殺されて、天下は項羽のものとなっていたでしょう。

さて、細という字は、糸と田で作られています。この『田』は『田畑』の田と同じ形をしています。古い形はで、頭の中身を表わしたものです。『腦』の右下や『思』の上の部分と同じものです。

✕の音は、*si*です。*si*は、*signal*の時、*シグナル*ですが、*sign*の時、*サイン*と発音するように、*シ*と*サイ*と二通りの発音があります。思は*シ*、細は*サイ*と発音しますが、それは『田』が表わしているのです。細



は、田がサイの発音を示し、糸が「ほそい」という意味を示していて、こういう漢字を形声字と言います。

謹の輩は、黄と土の合字で、黄河の上流にあって黄河を常に黄色く染めている黄土を表わした字です。黄土は粒子が極めて微細ですので、「細かい」とか「微小」の意味を表します。

従って、「謹」は、「言葉が極めて少ない」もしくは「ぎめ細かな言葉遣い」という意味を表していることが解ると思います。言葉を「つつしむ」ことです。慎は、「心をつつしむ」ことです。二つの字を合わせると「謹慎」という言葉になります。

僅は、「人が少ない」という意味の字ですが、今は人に限らず「少ない」「わずか」という意味に使われています。「僅少」という熟語があります。

饑は「食べものが少ない」という意味の字ですから、作物の出来が悪くて食糧が不足する状態を表わした字です。同じ意味を表した「饑」とで「饑饉」という熟語が作られています。

勤は、「ぎめ細かに心を動かして力（つと）める」という意味の字です。「力」は努力の力で、「つとめる」という意味に使われる字です。勤は、勤労、勤勉、精勤、などの熟語に使われます。

江戸時代、大名が一年おきに江戸に出て將軍に謁見するのを「参覲交代」と言います。この「覲」は、勤務として天子や將軍に「お目見え」するという意味です。

霜を履^{しも}んで堅^{けん}氷^{ひょう}至^しる

『堅い氷の張る寒い冬は、いきなりやって来るのでは決していない。その前に、霜の降り

る朝が何日か必ずあって、それから後にやって来るものである。だから、霜の日のうちに堅い氷の張る寒い日の備えをしておくことが必要である』という意味の言葉で、易経に見える言葉です。



この言葉は、『人殺しても平然とやれるような大悪人も、初めからそういう大悪人であることとはない。初めは、平気で嘘をつくとか意地悪をするとか、小さな悪事をしていたものが、次第にエスカレートして大悪事をするようになるのである。だから、小さな悪事のうちに注意して、悪を絶ち切る必要がある』ということを教えているとも考えられ、また『死に至るよう

な大病も、初めからそういう難病であったのではなく、油断の為に悪化して死病に至るのである。だから軽症のうちに手当てすることが大切である』という事を教えているとも考えられます。

さて、『屢』という字は、尸と復とで作られています。尸は、俗に『しかばね』と呼ばれていますが、実は『尸』のように、人が椅子に腰かけた形を象った字で、『人』を表わしたものです。これと『死』との合字である『屍』が『死んだ人』つまり『しかばね』を表わしているため、尸が『しかばね』と呼ばれるようになったものです。

尸のついた字に『屎・尿』があります。人体から出る『米』や『水』を表した字で、糞(米の変化したもののという意味の字)や小水を表わした字です。『屎』という字は、『人の至る所』という意味の字で、『室』と同じく『人の休む所』つまり『家』を表した字です。『家屋』という熟語がよくこれを表わしています。

尾は、昔、人が鳥獣のしっぽのように後ろに毛の飾りを垂らしていて、これを『尾』と言いましたが、鳥獣のしっぽそのものを、『尾』と言うようになりました。また、昔は家の出入口が低く小さくっていたので、出る時は体がかがめなければなりません。それで『人が出る』という『屈』が、『かがむ』という意味を表しています。

『復』は物の重なる事を表わした字で、内臓(腸)の重なった所の『腹』、布の重なった衣服(裏地のある)を表した『複』、同じ道を重ねて通ることを表した『復』などがあります。裏地の無い衣服を『単衣(ひとえ)』と言い、裏地のあるものを『複(あわせ)』と言うことから、単をシングルの、複をダブルの意味に使うようになりました。

復は、同じ道を行く意味の字ですから、往復と言うように、同じ道を通って『がえる』のに使います。『還』はぐるっと回って『がえる』ことです。さて、『履』は、『人が道を重ねて行く』意味で、『足でふむ』という意味を表したものです。

たげい おげい
多芸は無芸

『生まれつき器用で、芸という芸、何にでも手を出し、一応何でもうまくやりこなす、という人がある。しかし、やる事が多いために、力が分散されるので、すべてが中途半端

になってしまい、特に傑出した芸を持たないものである』という意味の諺です。

確かに『何でも上手』というのは、何でも一通りこなす、というだけであって、本当に上手なものはないものです。『二兎を追う者は一兎をも得ず』という戒めがありますように、あれもこれと手を出さずに、ただ一つの道を選



んで、それに力を集中させることが、成功への近道である、という事を教える諺と言えましょう。論語にも『君子は多ならんや』とあり、君子はいろいろなことができる必要がないことを孔子が弟子の子貢に教えています。このことは教育上大いに重視されてよいことだ、と私は考えています。

ところが、今の学校教育を見て下さい。何でも一応できる事を重視していますでしょう。多芸・多能を要求しています。世の中では、絵だけ、音楽だけ特に抜き出していたら、それで十分なのに、学校教育ではそれを許しません。

国語も数学も理科も社会も、すべてが良くできるのがよいのです。世の中にはそういう多芸多能の人もいるでしょう。そしてそういう人も世の中にいた方がよいでしょう。

でも、あらゆる人にそれを求めても、それは不可能であり、たとえ可能であるにしてもそれは決して望ましい事ではない、と私は思います。前に述べたように、あれもこれもと

手を出さずに、ただ一つの道をまっしぐらに進んだ方が、その能力を高め、世に役立つことも大きかろうと思うからです。

この頃『落ちこぼれ』という言葉がよく使われます。何か一つつまずいても、それを『落ちこぼれた』と言うのです。落ちこぼれとは、何一つ取り柄のない人間のことです。一芸に秀でていたら、人間として申し分ない、と私は思います。何でも出来る人間こそ『多芸は無芸』で、落ちこぼれと言ふべきです。

さて、芸の旧字体は藝ですが、本字は藝で、この古い形は、人がしゃがんで木の手入れをしている形を表わして、今の『農芸』つまり人間として必要な『技能』を表わした字です。今では広く『学芸』『芸能』というように使われています。

多は、月の変形である夕を重ねた字で、『林』と同じ趣旨の会意字です。夕方を多く重ねることから『おおい』という意味を表しています。

無は、ブという発音を示す無（舞も同じ）と…とで作られています。…は、火の燃える形を表わしたもので、煮・焦・煎・照・熱などの字に使われています。亡（ブ）の仮借だと説かれています。『火で焼き尽くして何もなくなってしまう』事と説いてよいでしょう。

いし くちすす
なが まくら
石に漱ぎ、流れに枕す

晋書（西暦二六五年から四二〇年にかけて中国に君臨した晋（しん）王朝の歴史を書いた書物）の孫楚伝に見えるお話です。

孫楚という人が、山の中に隠遁して自由な生活に入ろうと思ひその自然の生活を『石に枕し、流れに漱ぐ』という言葉で表現するつもりで、うっかり言い違えて、『石に漱ぎ、

流れに枕す』ときかさに言ってしまったものです。

ところが、人にそれをとがめられますと、頭の回転の速い、理屈の達者な孫楚は、すました顔で、『石に漱ぐとは歯を磨くということだ。また、流れに枕すとは俗世間のいやな話を聞いた耳を洗い清めることだ』と言つてうまく言い逃れた、というのです。

この故事から、負け惜しみの強いことや
うまく言い逃れることを『流枕漱石』とい
うこの言葉で表すようになりました。

今は余り使われなくなりましたが、『流石
（流枕漱石）』と書いて『さすが』と読む使い
方がありますが、これは『さすがに孫楚だけの
ことはある。うまく言いがれたものだ』とい



う事で使われるようになったものです。

また、明治の文豪、夏目漱石の『漱石』という号は、やはりこの故事から取られたもので、『さすがは漱石だ』と思わせるものがあります。

さて、流という字は沝（リュウ）と𣶒（サンズイ）とで作られた会意形成字です。沝は育の六と同じで、子をさかさにした形で、𣶒は水の変形です。

つまり、沝は水と共に胎児が生まれ出ることを表わした字です。流産した胎児のことを『みずご』と言いますが、漢字で表せば『水子』であり、一字にすれば『沝』になりますから、『沝』は『流産』を表した字だと言えます。

流は、水子が流れ出る意味の『沝』にㇿをつけて『水が流れる』ことを表したものです。硫は、『どけて流れやすい石』である『ゆおう』を表わしたものです。黄色い色をしているので『硫黄』と書き、『リュウオウ』と言ったのですが、『ユウオウ』となり『ユオ

ウ』と言われるようになりました。

旒は、旗の意味の𣎵に沝をつけて作られた字で、『吹き流し』を表わした字です。中国では旗を表わす字が『旌・旄・旛』などたくさんあります。旗は四角い旗のことで、其（キ）が四角を表わしています。（碁や将棋の其は、四角の盤を使うのでそれを表わしたものです）。

真心を『赤心』とか『丹心』と言いますが、『丹』は赤を意味します。旄は赤い旗のことで、旄は毛のついた旗です。旌は軍旗で、戦争で兵士を勇気づける旗です。兵士を生き生きとさせる旗ですから旌というわけです。

いちようらいふく
一陽来復

『良くない事が長く続いたあとに、良い事が回って来る』という場合によく使われる言葉で、易经に見える言葉です。



夏至が過ぎて陽氣が次第に減じて行きますと、やがて霜の季節を経て堅氷の張る冬至になります。冬至になりますと、全く陽氣というものがなくなってしまうますが、『陰極まれば陽生ず』で、その次には必ず陽氣が回復して来るものです。これを『一陽来復』と言うのです。季節に限らず、世の中の事というのは一旦悪

い方に向かい始めますと、どんなにそれを食い止めようと努力しても悪くなるばかり、という事が多いものです。その反対に、悪い事はかりが続いてそれが出尽くすと、今度は次第に何もかもがうまく行く、というように事態が好転することが多いものです。だから、物事がうまく行かなくて苦しい時でも、早くそこから抜け出そうとしてあれこれもかくとをせず、むしろ、早く落ちるだけ落ちれば『一陽来復』必ず良くなる時が来るのだと信じて、じっくりとあわてずに深く思慮をめぐらすことが大切です。

さて、『陽』という字は、崖の意味の『𡵓』と日と𠂔(日光)とこの字の発音を表わす丁(チヨウ)とで作られた字で、『日当たりの良い崖(南向きの斜面)』という意味の字です。中国山脈の南側を『山陽地方』と言いますが、これが陽の本義です。

陽の反対の陰は、阝と雲の形の云(雲の本字)とこの字の発音を表す今(キン)とで作られ、『日光のあたらない斜面、北向きの崖』という意味の字です。

湯は『日光であたためられた水』という意味で、温水ぬるみづ ↓ ゆゆ を表わした字です、音はタとユです。腸は、易の音チヨウが、長ながの意味を表していて、最も長い器官を表わしたものです。

復は、行の略形、イイと重なる、意味の復ふた（重なる意味は、目めにある）とて作られていて、復がこの字の発音を示しています。意味は『同じ道を重ねて行く』ということであえる、ことです。

帰は、自分の家に、かえる、こと。返は、反対の方向に、かえる、こと。還は、ぐるっと回って、かえる、こと。復は、同じ道を通って、かえる、ことです。同じ、かえる、でも、漢字にはいろいろありますから、意味を考えて正しく使いましう。

複は、裏地のある衣、という意味の字で、単衣（ひとえ）一重）に対する複衣（あわせ）合せ）を表わした字です。単のシングルに対してダブルの意味に使われます。音は復。

腹は、内臓の重なっている、はら、を表わした字です。音はこれも復です。覆は、おおいの形の西と、着けたり取ったりする意味の復とで、おおい、を表わしました。

先憂後楽

せんゆうこうらく

『天下の憂いに先んじて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ』つまり、『心配事は世の中の誰もが気づかない先から心がけてその問題を解決する事に努め、楽しみとは政治が立派に行われ世の中の子供のすべての子が楽しむようになった後に楽しむ』という為政者としての心構えを説いた言葉で、范仲淹の有名な『岳陽楼の記』に見える言葉です。

世の政治家たる者はすべてこうあってほしいものですが、今の政治家にはそのかけらほどもありません。それどころか、『天下の楽しみに先立って楽しむ、天下の憂いに後れて

『憂える』という政治家が多いようです。

今は野球場として有名な『後樂園』ですが、ここは昔水戸藩の江戸屋敷跡で、その庭園の名が後樂園でした。後樂園は寛永年間、水戸藩の始祖頼房が作り、その子光圀が命名し

たものです。光圀は、為政者としての心構えを

片時も忘れぬよう、庭園に『後楽』の名をつけ

たのだ、と思います。さすがは水戸黄門ですね。

さて、『先』は足の意味の止の変形した止

と、人の変形した儿との会意字で、『人がわれ

先にと足を前に踏み出そうとする』ことを表わ

した字です。さきんずる↓さき。

後は、行(ハナ)の意味の彳と、幼の意味の



么と、足(止)の意味の夕との会意字で、『幼い子の足(歩行)の遅い』ことを表わした

字です。『遅れる』ことから『あとになる』↓『あと』という意味になります。

么は糸の先端を表わしたもので、『わずか』『小さい』という意味の字です。幼は力の

小さい子供を表わしたものです。行は、十字路の形を表わしたもので、『道路』の意味の

字ですが、『道を行く』という意味で『いく』とも使われるようになりました。

憂は、顔の意味の頁と心と夕とで作られた会意字です。頁は、心に頭が重くのしかかっ

ていることを表わしていて、これが『心配する』という意味を表しています。憂は、心配

事があって下向き加減にゆっくりと歩くことを表わした字ですが、今は単に『心配する』

意味に使われています。

楽は、太鼓や鐘などの打楽器の形を表わした字で、『楽器』が本義の字です。今は、楽

器で演奏される『音楽』の意味に使われています。また、音楽を聴くと、心が『たのしく』

なるので、**たのしい** という意味にも使われます。

楽という字は、楽器の形から作られた字ですから**象形字**ですが、**たのしい**という使い方をするとき、これを**転注**と言います。車輪が転がってその位置が変わるように、漢字の意味が変わることを表わした言葉です。

つめ ひろ み 爪で拾って箕でこぼす

苦勞して爪の先で一つ一つ拾いためたものを、いっぺんにこぼしてしまうことです。『粒粒辛苦して貯蔵した物を一気に、または無造作に使い切ってしまう』ことや、『貯蔵する一方で浪費する』ことの意味に使われます。

箕とは、農家で穀類の殻(から)やごみなどをより分けるために使う道具で、**田**のような形をしています。これに両手をかけて、この中に入れた穀類(殻やごみの混じった)をあおりふって、また風を利用して、殻やごみを箕の外に吹き飛ばします。

箕の**其**が**貝**のように箕の形を表わしたものに両手(以)を添えたもので、箕の本字です。其が**それ**という代名詞や助字に用いられるようになり、それと区別するため、箕は竹ひごを編んで作る所から**竹**(竹かんむり)を加えて箕専用の字を作りました。

箕はおおむね方形をしていますので、**其**は方形の意味を表す部首として用いられます。

基は、家の土台(基礎)を表わした字です。家の形は普通方形ですから、土台も方形を



しています。

棋 は、方形の木という意味の字で、碁盤や将棋盤を表わした字です。碁や将棋の意味に使われます。例えば、碁や将棋を仕事にする人を「棋士」と言い、碁や将棋の世界を棋界と言います。

碁 は、碁石を用いて勝負を争う囲碁を表わした字です。元来碁も将棋も「棋」で表しているのですが、両者を区別するためにこの字が作られました。

旗 は、方形をした旗という意味の字です。毛で作った旗が「旄」、吹き流しが「旒」、四角い形をしたのが「旗」です。

さて、拾という字は扌（手へん）と合の会意字で、『物と手が合つ』という意味で「ひろつ」ことを表わしたものです。音は「ジウ」で数の「十」と通するため、『金拾万円』という使い方をされています。

合 は、亼（シュウ）、ロ（コウ）の会意形成字で、ここではロがこの字の発音を表わしていますが、「拾」では亼が発音を表わしています。

「亼」は物がたくさん集まっていることを表わした符号で、「人」（衆の本字）「や」「叢」（集の本字）と同じ構成で、いずれも「シュウ」という発音です。（人の集まりが衆で、鳥の集まりが集で、物の集まりが「亼」というわけです。勿論、今はそのような区別はありません）。

合 は、大勢の人の口（意見）が一致する、という意味で「あう」ことを表わしたものです。

だいしょうか
大は小を兼ねる

この言葉は、前漢の大儒・董仲舒（紀元前一七六―前一〇四年）の著書『春秋繁露（十巻）』に見えるものです。

『大きいものは小さいものの代りに用いることができる』という意味で、『小さいものよりも大きいものの方が有用である』という事を表わした諺としてよく使われる言葉です。とはいふものの、『杓子は耳かきにならず』という諺もあって、形はどんなによく似ていても『大きすぎるとは使い物にならぬ』という事もありますので、必ずしも『大は小を兼ねる』わけではありません。

やはり『過ぎたるは及ばざるがごとし』で何事もほどほどという事が一番です。生長のばげしい子供の衣服は、『大は小を兼ねる』と言って必ず大きめの衣服を選びますが、こ

れも余り大きすぎるとは子供がかわいそうです。

さて、大という字は、人が両手を広げて、体を大きく見せた形を表わしたもので、『おきい』意味を表しています。ダイ（タイ）という音は『体』に関係があるようです。『こ

んなに大きい』という時、体を広げて『大』の字を作って見せるでしょう。つまり、『体が』
『大』を表わしているわけです。

小という字は、一と八で作られ、棒（一）を分（八）けて『小さく』するということので『ちいさい』という意味を表したものです。八という字は、『分ける』という意味（分は刀でわける『こと』の字で、『はち』という数は、一



つものを二つに分け、また二つに分け、さらに二つに分けてできた数です。

小という字の古い形に「𡿨」があり、これが小という字のものと形だという説もあります。つまり、𡿨が変化して「小」となったのだということです。

兼という字は、二つの禾（稲の本字）と𠂇（手）とで作られ、『二つのものを一緒に持つ』ことを表わした字です。𠂇を合せて持つ↓がねる」という意味を表しています。二つの仕事を合わせて行うことを「兼業」「兼務」と言い、その他「兼用」「兼備（才色）」などの使い方があります。

嫌という字は、心が二つの事にまたがってどっちつかずの不安な状態を表わした字で、「あきたらない」「ごころよくない」という意味に使われる字です。「嫌」という字もこの意味に使われることがあります。

嫌という字は、女性がそういう状態を特に「きらつ」ので、「きらつ」という意味に使

われますが、どっちつかずの状態なので「うたがう」という意味にも使われ、『嫌疑をかけられる』という使い方があります。

鎌という字は、稲を刈り取る道具「がま」を表わした字です。これは、兼が稲を合わせ手につかむことを表していて、文字通り「稲を刈り取る道具」であることがよく解ります。

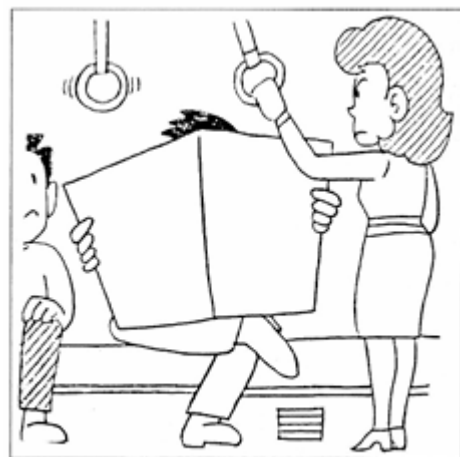
傍若無人 ぼうじゃくぶじん

史記列伝中、秦王政（後に始皇帝になった人）を討とうとして失敗した壮士、荊軻（ケイカ）の伝記中に見える言葉です。筑の名手である友人、高漸離の伴奏に合わせて荊軻が燕京の町中で、歌ったり泣いたりしたその有様を『傍（かたわら）に人無きが若（ごと）し』と表現しています。

つまり、周囲に人がいても、それに全く気を使わないので、これを『人がいないのと同じようだ』と表現したものです。

『人前をばからずに、勝手気ままにふるまう』ことから『人を人とも思わぬ無礼な態度、言動』を言うようになりました。

ところで、民主主義の時代になったというのに、逆に、傍若無人のふるまいをする人が多く目につくようになりました。『自由』を誤解して『放縦』になったためだと思います。電車の



中で大声で話す人、大声で笑う人、歌を歌う人、大きな口をあけてあくびをする人、鼻の穴を掘る人、これらはすべて傍若無人のふるまいと言

うことができます。

これは『自由』と『放縦』の履き違いに因ることですが、換言すれば、他人の気持ちまで思いやるだけの余裕がないという事であり、肉体ばかり大きくなって、心の生長がこれに伴わないことを示すものです。衣食は昔以上良くなったというのに『礼節を知らない』とはどうした事でしよう。

さて、『若』という字は、艹(草)とナ(手)と口とで作られた字で、説文(世界最古の漢字解説書)には『菜を擇(えら)び採ること』とあります。しかし、私は『摘んで(ナ)食べる(口)菜そのもの』を表わした字と考えてよいのではないか、と考えています。

いまは普通、『わかい』という意味の字として使われていますが、これは『弱』という字と発音が同じため、『弱輩』『弱冠(二十歳のこと)』を『若輩』『若冠』と書いて代用したことに始まります。

『春の野に若菜摘む』という歌がありますが、実は「若」という字も「菜」という意味も、「摘む」という意味もあり、そういう使い方をされたこともあったのです。おもしろいものですね。

『傍若無人』の「若」は、『如（ごとし）』の意味に使われていますが、これも若の発音と如の発音と似ているために代用されたものです。また、同じ理由で「汝（なんじ）」の意味に使われることがあります。

「無」という字は無（フ）と𠂔（火の別字体）との合字で、前者が発音を、後者が意味を表しています。『火は、物を焼き尽くして跡形もないようにしてしまう』という事から、物の「なくなる」こと「ない」という意味を表したものです。

無の𠂔は、「舞踏」の舞の𠂔と同じもので、フという発音を表わした音符です。𠂔は両足をそろえた形で、舞を舞おうとして足をそろえたことを表わしたものです。

覆水盆に返らず

『離婚した夫婦の仲は決して元通りにはならない』こと、また『一度失敗したら取り返しがつかない』ことを表わすのによく使われる言葉です。

周（紀元前一〇二七年〜前二五六年に中国にあった王朝）の文王及び武王を補佐して天下を統一するのに大功があった太公望・呂尚は、若い頃、家が貧しいのに少しも働かないで、書物ばかり読んでいました。それで妻は、あいそをつかし、離縁を申し出て家を去ってしまいました。

その後呂尚は文王に見出されて国政を任せられるようになり、やがて武王を補佐して殷を滅ぼし、天下統一の大功を建てて斉（春秋戦国を通じての大国）候に封ぜられます。すると、自ら去った妻が来て復縁を願いました。

その時、呂尚は盆に入っている水をこぼして言いました。『もしもこの水を元の盆に返すことが出来るなら、元通り夫婦になる事も出来よう。しかし、水は決して元の盆に戻るまい。そのように一旦離婚した以上は、元の関係に返すことは不可能である』と。



妻は夫を見る目がなかったことを恥ずかしく思い、簡単に夫を見限ったことをどんなに後悔したことでしょう。『覆水盆に返らず』は離婚を考える夫婦にはまたとない反省の良い言葉だと思います。

さて、『返』と同じ『がえる』と読む字に『帰る・復る・還る』があります。
『返』は、『びっくりかえず』『逆にす』

『返』という意味の『返』に、『道を行く』意味の『還』を加えた字です。だから、『今まで歩いて来た道を反対にもどって行く』『引き返す』という意味に使う字です。

『帰』は、本来その人が居るべき所にもどる場合に使う字です。本字は『歸』で、婦人が『どつぐ』ことを表わした字です。夫人が生家を離れ、婚家に止まるという意味の字です。だから、『おさまる』『おちつく』という意味に使われます。『帰化』『帰依』『帰属』などがこれで、『帰宅』『帰国』の『帰』とは意味が違いうことに御注意下さい。

『還』は、『二つ重なる』意味の『復』と『行く』意味の『還』とで作られた字で、『同じ道を重ねて通る』『往った道を通して『がえる』』ことを表わした字です。だから『往復』という熟語があります。

『還』は、輪の形をした、中に丸い穴のある丸い玉の環と、『還』とで作られた字です。同じ道を通らないで『ぐるっと回ってかえって来る』という意味の字です。『還暦』は、

千支（えと）がひとまわりしてもとにもどること、六十一才になることを表わした言葉です。今は『もとにもどる』という場合に使われます。

朱に交われば赤くなる

木のように、木の中心にしるしをつけたのが「朱」という字で、木の切り口を表わしたものです。それで「切りかぶ（株）」というのが本義の字ですが、切り株の中心に赤い色をした所があるので「あかい」という意味をも表すようになり、そのため、「切り株」を表すためには「木」を加えて「株」という字を作りました。

中国では、『あかの色の浅いものを赤といい、赤の色の深いものを朱という』と解説しています。それで、朱に交われば朱にならないまでも赤にはなる、ということで『朱に交

われば赤くなる』という訳です。

「赤」という字は、「大」と「火」との組み合わせで、『大いに燃える火』ということ、で色の「あかい」ことを表わしたものです。大が土に変形し、火が「カ」に変形してありますが、火の変形（別字体）したものに「熱」や「煮」の「灬」があります。いずれも

火の燃える形を象ったものです。

この諺は、『朱色のものに漬かっていたらその色が染みついて同じ赤色になる』ことから、『人は交際する友達の善悪によって善くもなり悪くもなる。友達の感化力は大きいので、友達は慎重に選ぶことが大切である』ということ、を教えたものです。



論語に『己（おのれ）に如（し）かざる者を友とするなかれ』とありますが、自分より優れた人物と交わっていれば、自然と感化され向上するものです。だから、何かにおいて自分より優れた性格、あるいは能力をもった友達と交際していれば、自然とその優れた性格や能力を見ならって、自分もそうなるものです。

ところで、『己に如かざる者』というのは、何でもかでも自分より劣っている人、ということ、全く取り柄のない人という意味だと思われます。しかし、人は、どんなにつまらないように見られている人でも、よく見ればきつと感心するような長所もあるものです。そうすれば、このような人も『己に如かざる者』ではなくて、友としても差支えないのではないでしようか。

論語には『三人行えばわが師あり』という言葉もあります。これなどは、正にそのような意味を述べた言葉だと思います。どんなにつまらないと思われる人でも、必ず長所もあるものであるから、その長所は“わが師”として学び取るに値するということです。

また、反対に、どんな立派な人でも、全く欠点や短所がないということもないはず。そうすると、これは『己に如かざる者』ということになりますが、実は、そういう欠点や短所も、わが身を反省する材料にするならば、これもまた“わが師”とするに値するものです。

つまり、良きにつけ悪しきにつけても常にわが身を反省するなら、すべて有難い“わが師”とならない者はない、という事です。

なまもの せつく
怠け者の節供働き

平生怠けている者に限って、お節句のような、皆が仕事を休んで楽しむような時に働く

者がいるものです。そういう人をあざけった

のがこの諺ですが、実際に仕事を怠けていま

すと、人が休んで楽しんでいる時に、苦労し

て働かなければならないような状態に追い

込まれます。これがほんとの『怠け者の節句

働き』というのかも知れません。

さて、節供は『節句』とも書かれます

が、『節』とは『竹』と『郎』との形声字で



『竹のふし』を表わした字です。転じて、音楽のメロディーの意味に使います。ふしまわし。曲節。

竹のふしは竹の幹を所々適当に区切っていて、竹をしっかりと保っている所から、『めくる』『ほどよい』『区切り』などの意味に使われます。節約、節制、章節。

また、季節の変わり目を『おりふし』と言いましたが、これを漢字で表したのが、『季節』です。今は一年を三か月ずつ四つにわけ、春夏秋冬と呼んでいますが、昔は二十四に分けてこれを『二十四節』と言いました。

『節供』は、一月七日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日という、十一月を除いた奇数月の奇数日に、季節の変わり目を祝う行事をそれぞれの季節に合わせて行いました。これを人日（じんじつ）上巳（じょうし）端午（たんご）七夕（たなばた）重陽（ちようよう）と呼んでいます。

また三月三日を『桃の節句』 五月五日を『菖蒲の節句』 九月九日を『菊の節供』と言
うこともあります。

昔、朝廷では、この五節句の日に、神々に供物（くもつ）をお供えし、舞を舞ったり宴
会を催したりしました。

それでこれを『節供』と呼び、ついでに『節句』という書き方が生まれたものです。

五節供のことを、昔は『五節（ごせち）』と呼びましたが、この日の料理が『お節料理』
というわけです。

『怠』という字は、台（たい）と心の会意形成字です。台は鼻の形の『厶』の下に口を
加えた字で、『笑』という意味の字です。『楽しむ』という意味と、『怠ける』という意
味がありますが、前者の場合は『怡』という字が使われるようになり、『怠』は後者に使
われるようになりました。

『怠』は大きな口をあけて笑っている形ですから、『喜び楽しむ』という意味になが
りますが、楽しみ疲れて大あくびしている形とも見えます。いずれにせよ、楽しみは程々
にすることが肝要です。

『働』という字は、人と動との会意形成字ですが、これは日本で作られた文字で、正確
には漢字ではありません。しかし、中国に逆輸出され、中国でも使われています。だから、
『峠・辻』などと違って、『ドウ』という音もあります。

渴^{かつ}しても盗^{とうせん}川の水を飲^のまず

盗川というのは中国にある川の名前です。盗という字は、本字は『盜』で、戦後の当用
漢字字体表で『盗』に改められました。

ㇿは、人が大きな口をあけた形を表わしたもので、ㇿくびが本義の字です。だから、ㇿ伸というように使われます。ただし、ㇿやㇿ飲やㇿ歌の場合は、単に口を大きく開くことを表わしています。ㇿ飲は、口を大きく開けて食べものをㇿのみこむという意味です。

今ㇿはㇿける、ㇿ席というように使われますが、ㇿはㇿゲンㇿで、ㇿゲツはㇿ決です。ㇿとㇿは形がよく似ているため、ㇿ缺(今のㇿの本字)ㇿがよくㇿ缺と誤って書かれ、そのため、ㇿが缺の略字として通用されたため、戦後の当用漢字でㇿ缺の本字に昇格しました。

ㇿ盗のㇿは、大きく開いた口から流れ出る水、つまりㇿだれㇿを表わしたものです。だからㇿ盗は、皿に盛られた御馳走を見て、思わずㇿだれㇿを流し、ㇿぬすみ食いㇿをする、という意味で、ㇿぬすむㇿことを表わしています。

ㇿ次はㇿ次ㇿが本字でㇿ二ㇿと全く同じように使うこともある字です。二郎次郎。本義は、『あくびをしてㇿつぎ(二)ㇿで結構と、のんびりしている』という意味で、先頭に立つという意欲が全くなくて、ㇿつぎㇿに満足していることからㇿつぎㇿという意味に使われます。

だから、ㇿ盗ㇿではとてもㇿぬすむㇿという意味は出てきません。ㇿ盗ㇿだからㇿぬすむㇿという意味になるのです。点一つでも意味が大変異なることがありますので、疎かにしたくないものです。

さて、この諺は、『盗川という川の名前がㇿぬすむㇿという意味を表しているので、そのような非行を名にもつ川の水は、どんなにのどが渴いても決して飲まぬㇿという意味で、少しでも不義にかかわりがあるような物は一切身に近づけない潔い気持を表わした諺です。』

盗川は川の名前に過ぎません。だから、その水を飲んだとて少しも悪い道理はありません。それなのに、のどが渴いて水がほしいのにその『盗』という名を憎んで飲まないというのは実に潔癖です。



だから、この諺は一般には『どんなに苦しい目にあっても不義はしない』という意味に使われていますが、本義はもっと厳しい意味の諺です。

この諺と同じように使われているものに『鷹は死すとも穂を摘まず』というのがあります。これは、どんなに困っても決して見苦しい行為はしない、という潔い気持をよく表

している諺だと思います。

あつものこ
なますふ
羹に懲りて膾を吹く

羹は、肉に野菜を混ぜて作った熱い吸い物のことです。羔は羊と…(火)とで作られた字で、焼いて食べる羊、つまり焼肉に適した『子羊』を表わした字です。従って、羹は、子羊の肉で作られた美味の吸い物、という意味で作られたものと考えられます。

膾は、肉を細かく切り刻んで、これを酢であえたものを言います。肉を細かく刻んでそれを會合させたもの、という意味で作られた字です。肉(月)と會との会意形成字です。中国では、膾炙(火で焼いた肉)と共に最も人の喜んで口にする食べ物であるところから、人の口にのぼりやすい、評判の意味に『人口(じんこう)に膾炙(かいしゃ)する』

という表現がよく用いられます。

さて、この言葉は楚辞(戦国時代の楚の憂国詩人として有名な屈原とその門下の作品を集めた書。代表作として『離騷』が特に有名)にみられる言葉で、『熱い吸い物で一度口

の中をやけどしたために、もともと冷えていて全くその心配のない膾炙までも、吹いて冷ましてから食べる』という意味で、失敗に懲りて用心しすぎる事の譬えに用いられます。

羊という字は、羊の頭部の象形で『ひつじ』の意味を表したものです。中国では羊の肉は美味の上肉とされ、神前の犠牲にも供せられました。羊と大とで『美』、羊と示(神)とで『祥



(めでたい)“などの字が作られています。

『羊頭狗肉(ヨウトウクニク)』という言葉があります。看板には羊の頭をつるして羊の肉を売る店と見せかけ、実は狗(犬)の肉を売りつける、という意味で、外見(もしくは宣伝)は立派でも実質がそれに伴わない事の譬えによく使われます。

羊羹(ヨウカン)と言えば和菓子の大様ですが、古くは羊の肉で作ったあつものを表わした言葉で(ヨウコウ)と読みます。『カン』は『ゴウ』の唐音です。

ついでに言いますと、善は羊と言との会意字(羊の字の左右を『言』ではさんだもの)です。美しい言葉という意味の字です。『善言』つまり、立派な言葉、有益な言葉、という意味の字ですが、今は『真善美』という言葉がこれを表わしていますように『道理になった行為』『立派な道德』を表わす言葉として使われています。

義は、美の意味の羊と我との会意字で、この字の音のギ(ぎ)は我(が)から来てい

ると思われます。人が我を見て、美と感じさせる行為、美しい行い、善行を表わした字です。人として踏み行すべき正しい道、という意味で、正義などの言葉があります。

左右の手を失えるがごとし

自分の最も頼みとする人を失って落胆することの譬えによく使われる言葉ですが、出典は史記の淮陰侯列伝にあります。

後に漢の高祖劉邦を助け、その建国に大功を建てて淮陰侯に封ぜられ、張良、蕭何と共に三傑の一人とたたえられた韓信も、初めは劉邦にさっぱりその才能を認めて貰えず、うだつが上がりました。

それで業をにやした韓信は、劉邦の陣中から逃亡しました。それを知った蕭何は、韓信を引きとめようとその後を追いかけてきました。

ところがそれが劉邦の耳には『丞相の蕭何が逃亡』と誤って報告されたので、劉邦は大いに怒ると同時に非常に落胆しました。その時の様子を『左右の手を失えるがごとし』

と言ったのです、



さて、左や右という字のナ部分、フのように手の形を表わしたものです。またエは、定規（じょうぎ）の形を表わしたものです。従って、左は、定規をもつ手、つまり「ひだり」を表わしており、右は、食べ物や口を運ぶ手、つまり「みぎ」を表わしています。

ついでに言いますと、𠂔 という字の 𠂔 の部分も 𠂔 のように手の形を表わしたものです。だから、𠂔 という字は、手と手とで握手を意味していて、それで「とも」を表わしたものです。

実は「灰」の「𠂔」は、旧字体では「𠂔」になっていて、火の上に手を乗せた形を表わしています。燃えている火の上に手をかざすことは出来ません。だから、火の上に手があることは火がすぐに消えて「はい」になっていることを意味しているという訳です。

戦後、新字体の制定で、「灰」となりましたが、これはどうしても「𠂔」でなければなりません。なぜなら、「𠂔」は切り立った崖の形を表わしたもので、「灰」では崖の下で火が燃えている、という意味になり、「はい」の意味にならないからです。

例えば、石や原や危という字の「𠂔」は、皆崖を表わしています。原は、今は「ばら」を表わしていますが、本来は泉の湧き出る崖を表わしていて、「みなもと」（源）が本義

です。（原子や原始の原がこれです）

さて、左手も右手も共に助け合って大事な用をなすものなので、「𠂔」も「𠂔」も「たすける」という意味を持っています。しかし今は人べんがついていて「佐（補佐）」「佑（天佑）」という字になっています。

失の「𠂔」は手を表わしていて、「𠂔」は手から物が落ちる様を表わした字です。手の中のを「うしなう」という意味を表しています。

てん みずか たす もの たす
天は自ら助くる者を助く

この言葉は、アメリカの独立戦争の時に活躍したフランクリンの好んで口にした

Heaven helps those who help themselves の訳語です。

他人の助けをあてにせず、自力で道を切り開いて行こうと努力する者には、自然と道が開かれ、成功するものである、という意味を表しています。

さて、天という字は、人が両手を広げた「太」の上に「一」を加えた形で、「頭」のてっぺんを表現した字です。「脳天」という使い方がこれです。



同じテンという字に「顛」がありますが、天と顛とは同音同義の字です。顛が「頭頂」の意味にもっぱら用いられているのに対し、天は頭上に広がる「大空」を表わすようになってしまいました。自は、鼻の象形で、「はな」が本義の字です。人は自分を指すのに「はな」を指すので、「自分」

という使い方が生まれました。自分とは「私の分(ぶん)(分け前)」という意味の言葉で、英語の mine にあたる言葉です。(ついでに言いますと、「私」という字もムが鼻の形を表わしていて「わたくし」の意味を表しています。へんの禾は稲を意味している字ですから「私」は、収穫した稲のうちの「わたくしの分」を表わした字で、だから「私」と「自分」とは全く同じ意味の言葉です。「私」を取った残りが「税」で、これが公用にあてられます。「公」という字は「ム(私)」を分ける、という字なのです。)

自が自称の意味に使われるようになりますと、「はな」の意味を表す専用の字として「鼻」が作られました。𠂔は𠂔(匕)の略字で、自の発音を表わしています。(今のジという音は匕の転化)。

助は、重ねる意味の且(ツ、シヨ)と力とで、『力をかけてやり協力してがんばる』ことを表わした字です。「たすける」こと。

且は地上に同じものが三つ重ねられた形を表わした字で、『重ねる』意味を表しています。

組は『糸を重ねる』こと。つまり、糸を何本も重ねて一本の太い紐を編むことを表わした字です。これを『組紐』といい、これを作ることを『紐を組む』というのです。転じて『多くの物を寄せ集めて一つにまとめる』ことを表わすようになりました。また『人を集めて一つの集団を作る』のにも使われるようになりました。

祖は『神』の意味のネと且とで、『もろもろの神』、それも父、祖父、曾祖父というように、『代々の神』を表わした字です。死んだ人の霊は神として祭られるので、亡くなった父、父の父、そのまた父を『祖（祖先、先祖）』と言うわけです。

粗は『積み重ねられた米』という意味の字で、『玄米』を表わした字です。保存するには『精米』は適しません。食べる直前に搗いて玄米を白げて精米にします。だから粗は

『あら搗きの米』です。

温故知新 おんこちしん

この言葉は論語（為政編）に見える言葉で、『子曰く、故（ふる）きを温（あた）めて新しきを知らば、以て師となすべし』がその全文です。

古くて役に立たぬように思われる知識でも、大事に保存して味わっていると、それが思いがけぬ新しい発見につながることもあることを教えた言葉です。

湯川秀樹博士は、中国古典の莊子の文からヒントを得て、それがノーベル物理学賞の中間子理論の発見につながったと言います。これなど正に『温故知新』と言えましょう。

さて、温は旧字体は溫で、シと皿（オン）との会意形成字です。皿は皿に盛った食べ物

を囚人に与えるということで、「暖かい」心を表わした字です。従って、温は「あたたかい水」または「水をあたためる」という意味を表します。（あたためるには煖という字もあります）。



温は心が厚い事ですから、懇篤（ねんこう）に学習するという意味になります。習熟の熟にあたります。何晏という学者は『温は尋なり』と解き、『故きをたずねる』と読む説もあります。

故は、攻や放の父と古の会意形成字で、古びたものをこわし捨てる意味の字です。「事故」とか「故障」など、わざわざの意味の字ですが、

多くは単に「古い」という意味に使われています。温故の故は「古」の意味に使われたものですが、強いて言えば、『古びてとても役に立ちそうもないような古き』とても言いましようか。

知は口と矢の会意字で、口から言葉が矢のように早く出てくるということで、「よく知っていること」「ちえ」を表わした字です。また、「ざとる」「感じ取る」「見分ける」「覚える」などの意味に使われることもあります。

新は昔の字は新で、辛と木と斤との会意形成字です。斤は斧の斤で「おの」の本字です。斧で木を切り「たきぎ」を作るということで「たきぎ」（炊き木）を表わした字です。今の「薪」は新が専ら「あたらしい」という意味に用いられるようになったため、「たきぎ」専用に作られたものです。

辛は辛で、罪人に入れ墨を施すのに使う注射針の象形で、「罪」。転じて「つらい」「が

らい”という意味に用いられる字です。例、辛苦。香辛料。

さて、たき木の切り口が“まあたらしい”ことから、新を“あたらしい”という意味に使うようになり、“あたらしい”という意味を表す他に適当な字がなかったこともあって、その専用字になってしまいました。もっともそのお陰で、新は今もなお脚光を浴びるほど人気のある字として使われています。それに反して、新の代りに作られた“新”は“新”より新しいのに過去の字になってしまいました。文字の栄枯盛衰は、人間のそれよりもはなはだしいものがあります。そう感じ取ることもまた、“温故知新”ででしょうか。